猿新聞

農村景観と農村生態系

多面的機能支払交付金の活用

水車のある風景

日本の農村（すいげんかんよう）は、水源涵養や国土保全に重要な役割を担っています。また、水田を基調とする景観は日本人の原風景です。

更に、春には鶯の鳴き声や若芽の色合、夏の緑輝く水田、秋の黄金色に輝く稲穂、冬の雪景色など四季折々の農村風景があり、山の斜面にも棚田や段々畑が作られており、人間の生活と自然が調和した農村風景の豊かな集落が点在していました。

しかし、今農村の景観が著しく低下しています。だが、地域住民の関心は非常に低く、中山間地域の自然環境と人間生活の調和の中で維持されてきた、農村風景の維持保全が難しくなってきています。

何気ない農村風景も、そこで農業が営まれているからこそ、美しい景観が維持されているのです。

しかし、中山間地域では高齢化・過疎化が進展、獣害の多発などにより、農業経営の維持が困難な状態で、放棄水田が増加し水田が持つ多面的機能の維持・発揮が困難な状態です。

それが自然環境に大きな影響を及ぼし、農村の多面的機能の低下や動植物の生息・生育空間の減少など、農村地域の生態系に様々な問題が生じています。

農村生態系は、田植えや、畦畔（けいはん）の草刈り、水路の泥上げなど、農業活動や集落活動の営みの中で、培い育まれてきたものです。

農村の景観が損なわれるということは、郷愁やノスタルジーの問題だけではなく、農村生態系保全や生物多様性を保全する上においても、大きな影響を及ぼすのです。

水田農業の維持は、農村生態系の維持、身近な生きものを育む豊かな生物多様性の保全に繋がるなど水田は、多面的機能を有する貴重なものなのです。

しかし、棚田は既に消滅して久しく、比較的平坦地域の水田も過疎高齢化により、耕作を放棄した水田が拡がり生物多様性と農村生態系の保全は困難な状況になっています。

今農村では、耕作放棄地が増え、再生利用が困難な耕作放棄地が拡大しています。

再生利用困難な耕作放棄地
名張市Y地区で

原因を突き詰めて考えるとき農業従事者の高齢化や農業の跡継ぎ不足などがあり、作りたくても作れないという実情がその背景に見えてきます。

農村景観は、個人的空間と公共的空間が一体となった景観です。維持するためには、自助・共助・公助の力強い協力が必要です。

耕作放棄は、生物多様性の保全に繋がっていて、水田が無くなり私達の身近なところでも、さまざまな生き物たちが人知れず姿を消しています。

メダカやタガメ・アメンボ・ゲンゴロウなど、かつて農村でごく普通に見られた生物が絶滅の恐れがあるほど減少しています。

近年よく見かけられるカブトエビ、ホウネンエビなどは外来種らしいです。

農村生態系を維持し、持続的な農業を目指すには、化学肥料や農薬の多投入や不適切な施用を避け、環境にやさしい、農業を確立することが強く求められています。農薬の多投入や不適切な施用や、化学肥料の過剰施用は河川や地下に流出し、環境に悪影響を及ぼしています。それがタガメやカエルなどの水生生物に多大な悪影響を及ぼし、姿を消す種が増えて来ています。

適切な生産活動を行うことによって、水田は多様な野性生物の生息地となったり、周辺の森林や集落と一体となり美しい農村風景を形成するなど、豊かな生態系の維持や良好な景観形成などに、重要な役割を果たすことに繋がるのです。

近年、耕作放棄地の増加や農村環境の変化により野生鳥獣による農産物被害が、中山間地域を中心として増加し、多種多様な侵入防止柵が設置されていますが、既に耕作放棄した圃場にまでも侵入防護柵は設置したままで、柵内は雑草が繁茂している状態です。このような柵が、集落周辺に点在し農村風景を著しく阻害しています。

また、柵の管理不足も多く見受けられ、特に集落柵は、被害防止効果は期待できない状態になっているだけではなく、農村景観を悪化させています。

近年、中山間地域では、太陽光発電施設の急増が見られます。

再生可能エネルギーの利用を進めていくことには賛成ですが、農村景観を始め、動物・植物・生態系への影響が問題となっています。今後、これらの問題を踏まえ、再度、事業者と膝を突き合わせての話し合いが必要です。

農村景観とは、単に視覚的なものだけではなく、自然や先人たちの生活により、長い年月の中で培われてきた地域の歴史・文化でもあります、維持・保全に勤め次世代に引き継いでいくことが、私達に課せられた重要な課題となっています。

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:205部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区:125部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

多面的機能支払交付金

国は、農村のこの現状を踏まえ、農村の有する多面的機能の発揮・存続を図るための地域共同活動の支援策として、平成27年4月1日から、多面的機能支払交付金制度が制定施行。ちなみに、多面的機能支払交付金は、農地維持支払交付金と資源向上支払交付金から構成されています。

名張市では、支払交付金活用組織は24地区にのぼり、名張市全域に亘り活動をしています。その面積は553haとなっています。

交付金による活動はその地域によって様々ですが、今回は、矢川地区において、交付金を活用し活躍されている「矢川環境保全会」の取り組みの一端を、紹介して頂きます。

矢川環境保全会の取り組み

景観形成・生態系保全へ

矢川環境保全会は、2021年度で発足14年目を迎えます。

全戸数が80戸、認定農用地は水田が28.3ha、開水路6.4km、農道4.7km、ため池7カ所と非常に小規模な地域で、農業従事者の高齢化と担い手不足は年々深刻になっています。

こうした中、当会は名張市の「多面的機能支払交付金」を活用し、5項目（①農用地、遊休地②農道 ③水路、ため池 ④景観形成、生態系保全 ⑤世代間交流事業）において、非農家を含む地域ぐるみで活動しています。

花いっぱい運動

景観形成については、8年ほど前から熱心に取り組んでいます。まず近鉄赤目口駅から矢川に至る沿線の直線道路の法面に、総延長約500メートルにわたって約4000本のシバザクラを植栽しています。寒い冬に新しい苗を植え、その後は草引きや枯れた苗の植替えなどを繰り返した結果、今では3～5月のシーズンには鉄道カメラマンや市民らが「花のジュータン」を見学に来られます。

次に、年2回（6月、12月）開催しているプランターへの植栽活動です。区民の約7割が参加し、楽しく会話しながら7～8種類の季節の花を各自のプランターに植え、自宅前に並べています。

さらに矢川春日神社前の河川の土手約60メートルにつつじを植えています。定期的な整備活動のおかげで、5月になると紅白の花を咲かせ、新たな「花の名所」になりつつあります。

この他、最近では近鉄沿線の約5000㎡の休耕地に菜の花を植えており、春にはシバザクラとの「共演」が楽しみです。

ホタルを育てる

ホタルが飛び交う美しい自然は田舎の原風景です。そうした姿を復活したいと、数年前から「天道」と言われる水路をホタルの繁殖地に指定して、年2回の泥上げ作業や法面の整備などに取り組んでいます。民間のホタル研究家の指導を仰ぎながら、「天道」や神社前の河川を対象にホタルの棲みやすい環境つくりを通じて、生態系の保全を図っています。

ちなみにホタルの繁殖活動については3年前、

←2面に続きます

蛍を呼び戻す
溝掃除

近江八幡市金剛寺町の市民グループ「湧水の郷金剛寺」から当会の活動を見学に来られて以来、相互の交流が続いています。金剛寺町では一昨年、「５０年振りにホタルが河川に戻ってきた！」と現地の新聞にも大きく報道され、当会との交流に感謝の言葉をいただきました。

２０２１年度は、新しく加わる女性役員の皆さんのパワーも頂きながら、住民ぐるみで環境保全活動を進めていく方針です。

文・矢川環境保全会　山田　泰次氏

猿害の背景にあるもの

冬から早春にかけては、山中でのの餌が乏しくなるため、サルが他の季節より大胆に農地や集落に出没し、日当たりがよく暖かい場所や餌が簡単に入手できるような特定の場所を中心に、定着し生活するようになります。

誘引物を無くす

この時期、農地では冬野菜や柑橘類など、収穫前の作物の他、収穫時に選別して圃場周辺に放置した残渣をサルが狙います。まずは、サルを誘引していると思われる餌などを除去すると共に、追い上げを徹底し、耕作地や集落周辺をサルにとって危険な場所と認識させることが重要になります。サルを誘引するといわれる餌は、人間にとっては被害と感じられないものが殆どで、取られても多くの人は見て見ぬふりをしています。しかし、サルたちにとっては立派な食料です。

これが無意識の餌付けとなりサルを誘引しているのです。

農作物は自然のものに比べれば消化率や栄養価の高いものが多く、食べられる部分が多いため採食効率も高くなります。農業被害は、サルが農地や集落を自分たちの採食場所と認識してしまうことによって起こるのです。

現在の集落や農地は、サルは理想的な採食場所と認識していて、サルにとってはレストラン的存在です。

人を怖がらない

サル群はめったなことではその行動域を変えないので、一度旨いものにありついた畑などは、覚えていて何回でも遊動してきます。

最近では、里で生まれ育ったサルが多数を占めるようになり、山で生活することが困難なサルが多くなっていて、里に定着状態です。

中山間地域は、過疎高齢化が進行し日中は老人ばかりで、野生動物に対する人圧は大きく低下しています。

サルは畑に出てきてもほとんど人に出会うことはなく、たまに出会ったとしても老人ばかりで、人が怖いものだということを学習していないサルが多くなっています。このまま放置していると、人を怖がらないサルが増えるばかりです。

集落や農地周辺に定着したサル群は、山に定住状態のサルより個体増加率が高く、群れ数、分布域も増加し更なる農林業被害拡大に繋がるのです。

名張Ａ群においても対策を徹底しても、被害発生範囲の広がりと、生活環境被害の拡大が問題になっています。

全国的に被害増加率が高いのは市街地の耕作地と言います。

対策はその群れや地域の環境によって様々ですが、「人間は怖いもの」「人里に近づくことは危険」であると、学習させるためには追払いを地域全体で協力して行っていくことがとても大切です。

群れの遊動域は固定的ですが、季節的に変化したり、周りの群れとの関係や環境の変化によって、経年的に変化することがあります。里に居着いたサルの群れと、人間の生活圏を分けるための積極的な、「棲み分け」対策が今求められています。

拡大造林政策

１９６０～７０年代、サルの生活を大きく変えてしまうできごとが起こっています。それが拡大造林です。つまり広葉樹林の伐採とスギやヒノキなどの針葉樹人工林への変換です。

その結果、サルは生息圏を奪われ残ったのは、果実資源に乏しい針葉樹林、「緑の砂漠」だったのです。

拡大造林により「緑の砂漠」といわれるくらい木の実などは激減。サルたちが食物を求めて人里へ下りてくるようになった一つの要因として、拡大造林政策が考えられています。

もう一つの理由は、農村の過疎化、高齢化、農家の兼業化が進行したことによって人間の畑を守る力が減少したことです。

サルは学習能力が高いので、楽に餌を食べられる方法を学習していきます。農作物に依存する要因としては、奥山の広葉樹林の減少もさることながら、人間の排除圧力が低下したことです。しかし、森林再生を図り「緑の砂漠」を解消し棲み分けを図ることが、私達に課せられた課題でもあります。

増加率

高カロリーの農産物を餌にしているサルは、繁殖力が高くなります。

エサが乏しい山奥のサルは、初産までに生後６～７年を要し、出産間隔は2年に1回以下です。赤ん坊の死亡率は半分近くあるので、現状維持か、１頭のメス当たりほぼ、１頭が増えるくらいです。

農作物を食べるなどで餌条件が良くなれば、出産率は高くなり、幼児死亡率は10％以下にまで下がるといいます。

サルの捕獲

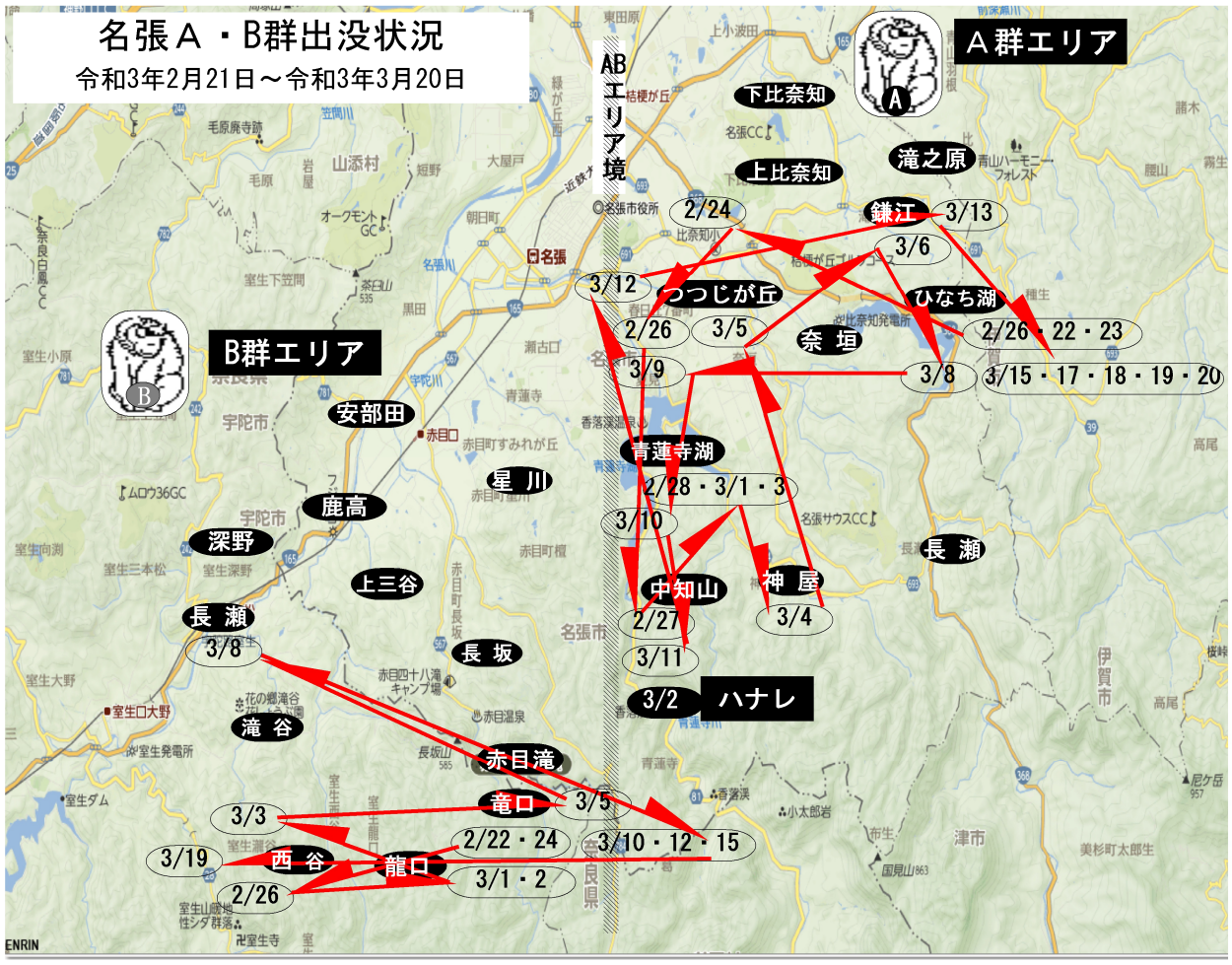
最終的な手段として捕獲があります。

全国的に捕獲数は増加傾向にあるにもかかわらず、被害は高止まりで分布域の拡大は続いているといいます。

捕獲には個体数調整・有害鳥獣駆除・狩猟などがありますが、いずれにしても、捕獲はその命に関わる重大な行為です。

サルは、生態系を構成する私達人間と、同じ一員であるということ忘れてはなりません。

※サルは狩猟獣ではなく、狩猟で獲ってはいけない動物です。



サル出没状況

本来、サルは、森林の動物で森林外で活動することはあまりありませでしたが、集落内の農作物を安全でしかも美味しいを餌として利用できることを学習し、農作物への依存が常態化するようになり、サル被害対策は非常に困難となっています。

サルは餌を求めて、ある程度決まった独自の行動範囲の中を、周期的に行動しています。

特定の地域にサルがやってくることには理由があります。

それは、餌が豊富で安全という条件です。

サルは記憶力が良い動物で、餌が豊富で安全と認識すると居着いてしまい、滞在の長期化の原因にも繋がっています。

中知山周辺ではハナレが出没しています。

「盗られてもかまわない農作物」「気づかずに与えている餌」に気づき、人里や農地では徹底してエサを与えない努力をしましょう。

フリートーク

ある日の夢
豚・鶏たちの声！

人間社会では新型コロナの収束に向けて人々が自粛生活を続けています。また、感染者の快復に医療関係者が頑張っておられ、心からの感謝の思いです。畜産業界でも、豚熱や鳥インフルエンザは、いまだに収束に至っていません。感染したら同じ飼養場では「クラスター」と判断され一斉に数百頭や数万羽が殺処分される現実があります。豚・鶏が畜産業者に飼養されているのは私たちの食肉に供するためなのに、その本来の使命も終えないまま仲間のたった１匹や1羽の豚熱や鳥インフルエンザで、一斉に殺処分され、白い袋に詰められ地中深く埋められていく光景。畜産業者のやるせないタメ息とともに、殺処分され地中深く埋められた鳥獣たちの無念の命の鳴き声で目が覚めた。耳元で鳴いたのは我が家のイヌ。埋められた鳥獣たちの無念の鳴き声と錯覚したのです。

三重県では豚熱ワクチンの散布を野生イノシシを対象に実施し養豚場への感染防止措置を試みているとの報道を見聞し、今後は痛ましい処分の無い事を祈るばかりです。感染の豚も鶏も人との感染はなく「肉は充分な加熱処理すれば食用可能との報道もありますが、鳥インフルの「人体への感染発生」と真偽は別にしてロシアでの報道もあり、心理的な面からも私たちの食用としての躊躇があるのも確か。殺処分された鳥獣の命を無駄にせず、今後の医学・獣医学や食品衛生医学の研究に期待し、その「食用安全宣言」の出る日を期待しています。

文・畠山　ひさ子